

Title	草創期のカストリ雑誌とグラフィック表現
Author(s)	藪, 亨
Citation	デザイン理論. 2007, 50, p. 146-147
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53181
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

草創期のカストリ雑誌とグラフィック表現

藪 亨／大阪芸術大学

カストリ雑誌と呼ばれた一群の大衆娯楽雑誌が、太平洋戦争終結後の連合軍による「日本占領期」に、戦後の「言論の自由」という時流に乗って各地に多数現れては消えていった。カストリ雑誌という呼び名の由来は、当時の粗悪なカストリ焼酎にあり、これを三合も飲めば泥酔することから、3号でつぶれる雑誌をカストリ雑誌と称したとも俗に言われている。こうした雑誌群は、グラフィック表現と言語表現を大胆に駆使して人間性や性の解放を謳歌し、戦後に解き放たれた大衆文化の源流のひとつを形成している。そこで本研究発表では、草創期の代表的なカストリ雑誌をいくつか取り上げて考察したい。

1. 『リベラル』誌をめぐる

カストリ雑誌は、その記事内容から見ると「読物」と「風俗」の2つの系列からなっている。まず「読物」の系列の口火を切ったのは、終戦の翌年の初春に刊行された『りべらる』誌である。これの創刊号（昭和21年1月、太虚堂）の体裁は、B5判グラビア2頁、本文32頁の薄い雑誌であり、本文用紙は後の粗悪な仙花紙ではなくて、ザラ紙で定価1円50銭であった。内容的には、アメリカ文化の導入が企てられるとともに、やがて昭和22年から23年にかけて吉田政府が打ち出す3S（スポーツ、スクリーン、セックス）政策が先取りされており、総合文化誌的な色合いの濃い雑誌として出発している。

この『りべらる』誌創刊号のシンプルで手堅い表紙デザインと写真口絵などには、戦前に日本に受容されていたバウハウス流のモダ

ンなグラフィック・デザインが濃い影を落としている。ところが『りべらる』誌9月号（第1巻第7号）の表紙は、より華やかで装飾的な人目を引くデザインになっており、本誌が創刊当初の「総合文化誌」的な性格から扇情的な「読物誌」へと色合いを転じる様子を、これらからも見て取ることが出来る。

また『りべらる』誌には、創刊当初から既に名の知られていた挿絵家や画家がカットや挿絵を提供しており、岩田専太郎、藤田嗣治、猪熊弦一郎などの名前も散見される。

2. 『赤と黒』誌をめぐる

一方の「風俗」の系列は、「読物」よりも少し遅れて昭和21年秋に現れており、性風俗や性科学を取り上げている。この系列の先陣を切ったのは『赤と黒』誌である。当誌創刊号（昭和21年9月、リファイン社）は、B5判で口絵はなく、本文は仙花紙で48頁、最後の2頁は白紙で、定価は30円であった。内容は、「秋夜不眠号・肉体芸術特集」という見出しのもとに、性科学的な学術的姿勢が支配的であった。

そして『赤と黒』誌創刊号の表紙（図4）は、上方に題字が赤色と青色と黒色で示され、その下方の赤い正方形の縁取りの内側には、肉感的な線描画が薄い青のヴェールを伴って飾られ、この赤い正方形の縁取りの下方には「秋冬不眠号 肉体芸術 特集」と銘打たれている。峰岸は、「耽奇尖端特集号」と銘打たれた『赤と黒』誌第3号の表紙（図6）も手掛けている。この表紙は、黄色と赤色の矩形面のみで表現されており、題字の「赤と黒」

は形も色彩も極めて簡潔で経済的であり、一見して戦前のロシア構成主義的な造形を彷彿させるデザインとなっていた。しかしこの表紙デザインに関連して、本号掉尾には本誌編集責任者の高橋鐵による「偽善者共への公開状——読者諸賢へ〈真相〉を訴ふ」が掲載されている。そこでは「旧日本の出版史上にも曾てなかったような誹謗と圧迫が我等の頭上に浴びせられている」ことが訴えられており、当誌への世間の一部からの風当たりが強まっていたことがわかる。

3、『獵奇』誌をめぐって

「風俗」系列のもうひとつの代表格が『獵奇』誌である。当誌創刊号（昭和21年10月15日発行、茜書房）は、B5判で口絵はなくて、本文は仙花紙で48頁、活字は普通のものよりも大きな5号で本文は3段組み、定価は10円であった。掲載記事は読み物的な色合いが強かった。

この『獵奇』誌創刊号の表紙は、田口泰三が担当しており、地色は黒で、画面の右方と下方を貫く薄緑と橙色の細線が画面右下で直交し、タイトルその他の文字は白く抜かれ、中央には橙色の若い女性の顔と薄緑手の袋をはめた手が飾られている。モンドリアンのニューヨーク時代の幾何学的な抽象作品を想起させるような側面と、アール・デコ風の装飾性が共存している。そして当誌第2号の表紙は、資生堂のデザイナーとして、また戦前の対外宣伝誌“NIPPON”の挿絵家として有名な山名文夫が担当している。この表紙は、橙色と薄い青と黒の3色刷りで、ビアズリー張りの装飾的で官能的な女性像が、古代ギリシアの円柱や女性の脚部などとシュルレアリスム風に組み合わせられて、飾られていた。また第4号の表紙では、腰みのみでレイを首に掛けて横たわる着色セミヌード写真が用いられて

いる。このセミヌードは、官能的な陶酔からほど遠く、セクシャルな魅力に欠けており、むしろグロテスクでさえある。しかし当代においては人々の飽くなき「見ることへの渴望」にひとまず応えるものであったといえよう。

以上のように草創期のカストリ雑誌のグラフィック表現は、戦前に西欧型のモダン・デザインやモダン・アートからの影響下に醸成されていた既成のタイポグラフィ的な枠組みを堅持しており、戦時中に抑圧され当時まだひっそりと隠されていた性を公然化するものに留まっている。しかし、『獵奇』誌第2号が、これに掲載された北川千代三作、高橋よし於画「H大佐夫人」の性表現が「刑法第175条」に反するという理由で、「わいせつ物の頒布販売罪」で起訴されている。そしてこの頃から、再びこの種の雑誌に体制の側からの監視と制約が復活し始めており、また一方ではGHQの検閲による表現の抑圧やアメリカ文化の大量流入もあり、カストリ雑誌はさまざまな文化的・社会的な諸問題を孕みながらその盛期を迎えつつあった。